

28P-am470

大阪道修町における試薬業界の変遷(2)―薬種業から試薬業へ―

○宮崎 啓一¹, 宮本 義夫², 三島 佑一³(¹三栄化工, ²くすりの道修町資料館, ³四天王寺大名誉教授)

【目的】かつて大阪(または大坂)道修町は、大手製薬会社および医薬品卸等の医薬関連企業の本拠地であった。その多くが医薬品の取扱いを中心とする企業の集まりであったが、なかには化学工業薬品・試薬(以下、「試薬」とする)の取扱いに転じた流れがあった。先に演者らは国内および大阪道修町における黎明期の試薬業に関して報告した¹⁾。今回道修町の多くの薬種業者のなかにおいて、試薬の取扱いに転換した薬業家について、さらに調査・検討を重ねたので、その結果を報告する。

【方法】既存資料の再検討および実地踏査による資料収集・確認によった。

【結果および考察】古代、中世および近世を通じて、大阪には薬の流入をうかがわせる歴史上の背景が存在する。かつての道修町は主に薬種の取扱いに端を発した薬業家を中心に発展した。うち試薬の取扱いに転じた薬業家が発生した要因としては、明治期の薬事制度の整備と医制発布等による洋医の増加に伴う洋薬の消費および政府の殖産興業下における化学工業薬品の製造・使用の増加によるものが考えられる。また、道修町における試薬業の草分けといえる存在としては、明治期における石津作次郎創業による石津薬舗(後の石津製薬株式会社)および七里清助創業による七里薬舗の二者があげられる。両者は薬種の取扱いを中心とした道修町において、自他ともに認めるところの草創期の試薬業者であった。また、ともに試薬への取扱いの転換のモデルケースであり、両者を通じ、試薬業および製薬業との関連を検討することについて、意義深いものがあると考えられた。

【文献】1) 宮崎 啓一、宮本 義夫、三島 佑一、“大阪道修町における試薬業の変遷―試薬業の黎明について―”、日本薬史学会 2009 年会(金沢) 講演要旨集、p.29-30(2009)